

「中央本線の車窓 (5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

甲州市塩山にポツンとある「塩ノ山」は、塩山の地名の由来になった山である。私はもともと海底だった場所が隆起して、岩塩でも産する山のように思っていた。或いは、信玄が海のない甲州にあって、戦に備えて塩を備蓄した山ぐらいに推理していた。しかしいずれも間違いだった。「塩」とは無関係なのだ。

独立峰であるこの山は、四方から見える山という意味でももとは「四方の山」と呼ばれていたらしい。それが「しほうのやま」「しほのやま」「塩ノ山」となり「塩山」の地名が生まれたというから驚いた。



確かに塩ノ山は、塩山扇状地のどこからでもよく見える。勝沼方面からは台形に見えるが、塩山駅付近からは円錐形に見える。まるで「始皇帝陵」のようだ。一時は「塩ノ山ピラミッド説」まで噂されていた。

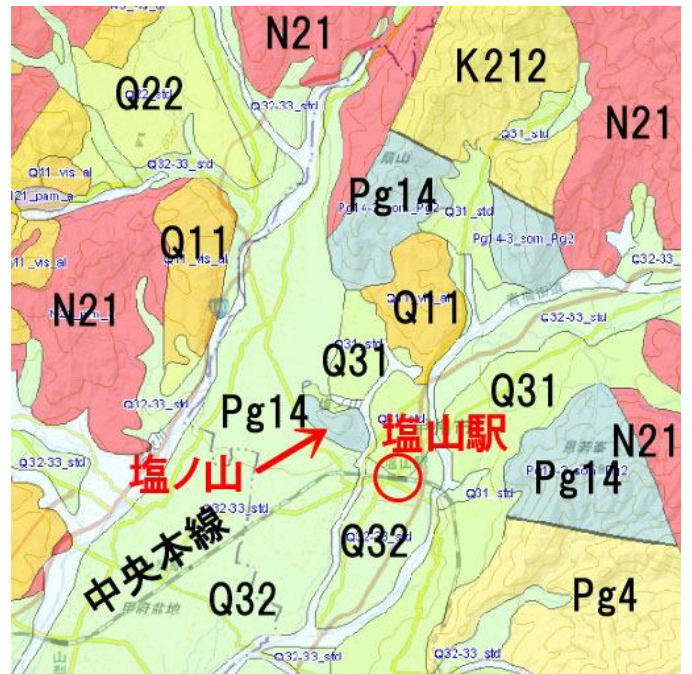
この山の成員を地形から判断するのは難しそうだ。そうすると登場するのが「地質図」である。地質図は等高線だけではわからない、その土地そのものの成り立ちを教えてくれる。右上図が塩山扇状地の地質図である(産総研基本図、記号や地名は筆者付記、2ページ目に拡大)。非常に複雑な地質で構成されていることがわかる。「地質のデパート」と言っても良い。地質境界の直線的な太線は「断層」である。

盆地を取り囲む赤 **N21** は新第三紀(約 1400 万年前)の火成岩で、主として花崗閃緑岩である。有名な塩山竹森の水晶も、この **N21** のはずれにあるペグマタイトの鉱山跡から採集できた。



塩山市(現甲州市)竹森産の水晶(1983年採集)

橙の **Q11** は第四紀(約 200 万年前)の火成岩で、主として安山岩で構成されている。薄緑の **Q32** や **Q32** は、扇状地の段丘堆積物で、年代も数万年前から現在に至るものである。



さて、塩山駅の北西にある「塩ノ山」の **Pg14** は「付加体」と呼ばれるもので、海底堆積物が「プレートの潜り込み」によって剥ぎ取られ、陸側に付着し、その後陸化した地層である。**Pg14** は古第三紀始新世～漸新世(約 5000 万年前～3000 万年前)のもので、主として泥岩で構成されている。周囲にも同じ地層があることから、少なくとも塩ノ山は独立した火山ではないことがわかった。右上方の **K212** も付加体で、こちらは中生代白亜紀の砂岩というから、実に興味深い。

なぜ塩ノ山が周囲の同じ地層から独立したのか不明だが、長い年月の間に山体は侵食されつつ、「扇状地の堆積」からは免れて、現在に至ったのだろう。私はこの数千年前の「付加体」という地質に興味を持った。次回訪れたら、塩ノ山に登ってみたいと思う。



